

## 回想のラヴェナム紀行

イングランド東部サファク州のラヴェナム (Laverham) は、人口一三〇〇人(一九七九年当時)という小さな町である。ここは、イギリス資本主義の勃興期をリードした毛織物工業が、いわゆるマニユファクチュア時代に入る前の一五二〇年代に最盛期を迎えたことで知られる。その後、幸か不幸か、産業革命へと続く工業化の道をヨークシア、ランカシアに譲り、一九世紀にはコンスタブルによって描かれた農村地域の一点景にとどまって今日にいたったために、一五〜六世紀に建てられた多くの建物を歴史遺産として残している。その中のいくつかをわたしがたどった道筋にそって、写真とともにふりかえってみたい。

松村幸一

わたしがこの町を訪ねたのはふた昔も前の一九七九年九月二日のことであるが、その日の備忘録は、ロンドンからラヴェナムへのアクセスを次のように記している。

八時三〇分ごろ下宿を出てリヴァプール・ストリート駅へ。サドベリまでの切符は売ってくれないので、マーク・テイの往復買う。汽車は一〇・〇五発。マーク・テイに一一・〇七着。サドベリ行きのローカル線が待っていて乗り換え、サドベリには一一・二九着。バス乗り場がわからないのでまごついてみると、いっしょに降りたおばあさんが声をかけてくれ、連れて行ってくれる。ところが、そのころ出るバスがない



ので町のセンターで昼食(サンドウィッチとコーヒー)をとって(画家ゲインズバラの出身地だそうで、教会の前に彼の銅像が建っている)、タクシーに乗る。一五分ほどでラヴェナムはスワン・ホテルの前に着く。チェックインして三九号室、白壁に黒い木の柱や梁の出した部屋。二時ごろから町を歩く。

スワン・ホテルから教会へ

ハイ・ストリートに面して白鳥の看板を掲げるスワン・ホテル(写真1)は、白壁に黒い柱(いわゆるハーフティンバー造り)で二階が一階より前にせり出しているテューダー時代特有の建物であるが、ニコラウス・ペヴスナーの『イングランドの建築物・サファク編』によると、その地下室の年代は一四世紀にさかのぼるといふ。写真の右端、ウォーター・ストリート側の白壁には羊毛商人の商標である花模様が刻みこまれていて、原料の羊毛をもたらし織物を仕入れるために往来した商人たちの旅籠であったころのしるしを残している。

スワン・ホテルを出てチャーチ・ストリートを南下すると、町はずれにセント・ピーター・アンド・セント・ポー



写真1 スワン・ホテル

ル教会（写真2-a）がある。この建物はその大部分が一四八五年から数十年のあいだに、つまりテューダー王朝の初期に建て直されたものであり、いわば成立期の絶対王政権力と最盛期の毛織物工業との幸福な結びつきを体現している。そしてそのことを象徴する二人の人物がある。

その一人はラヴェナムのマナー領主、一三代オクスフォード伯、ジョン・ドウヴァイア（一四四三—一五一三）である。その家系は一一世紀の征服王ウィリアム一世の時代にさか

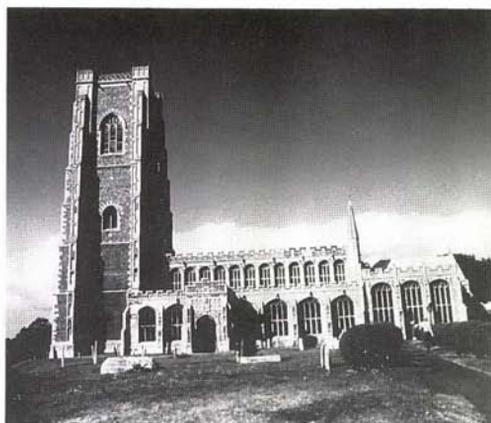


写真2-a セント・ピーター・アンド・セント・ポール教会

のぼる旧家の貴族であり、ヘンリー・テューダーの軍隊の総司令官としてバラ戦争を戦ったこのジョンは、テューダー家の勝利を神に感謝するために教会の建て直しを唱導し、これに応じて醸金したのが富裕な織元たちであった。

教会の南ポーチ（写真2-b）の前に立つと、アーチ型入口の上両脇に向きあう二頭の豚が見え、また入口左右の基底部に星と楯が彫られている。豚と星はドウヴァイア家のシンボル・マークで、楯は紋章をあらわしている。なぜ豚

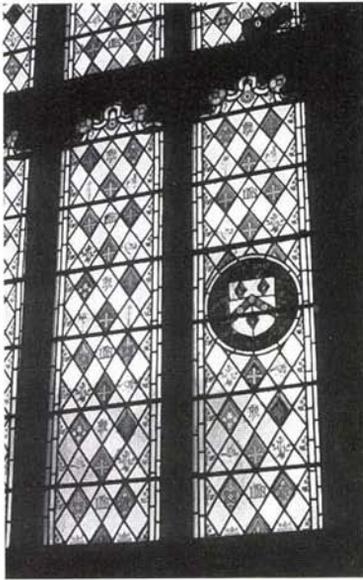


写真2-c スプリング家の紋章

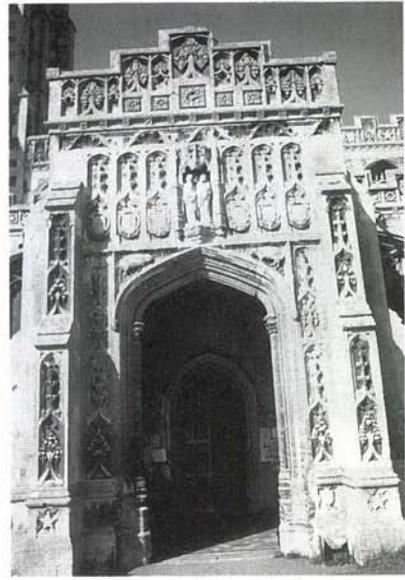


写真2-b 教会の南ポーチ

がシンボルになったかといえは、豚のラテン語 *verres* とドウヴィアの *De Vere* との語呂合わせである。

多くの織元が教会建て直しのために醜金したが、もっとも突出していたのはトマス・スプリングである。彼は一五世紀末から一六世紀初頭にかけて巨富を築いた織元スプリング家の、三代続いた同名のトマスの三代目。一五二二年に所有した動産三二〇〇ポンドは、サファク州ではノーフアク公の四〇〇〇ポンドに次ぐものであった。その他、サファク州内一六のマナーをはじめ近隣にも多くの土地を所有していた。トマスは一五二三年の遺言によって、教会の尖塔を完成させるために二〇〇ポンドを遺贈したが、彼の遺言を執行した人たちは、彼の希望をかなえるために教会内に彼の墓や礼拝堂を設けるなど、遺産からさらに八四七ポンドを支出した。ステンドグラス(写真2-c)に見られるのはその貢献をたたえるために作られたスプリング家の紋章である。

チャーチ・ストリートからウォーター・ストリートへ

ペヴスナーの案内にしたがって教会からチャーチ・ストリートに戻ると、左側に例のハーフ・ティンバー造りの民

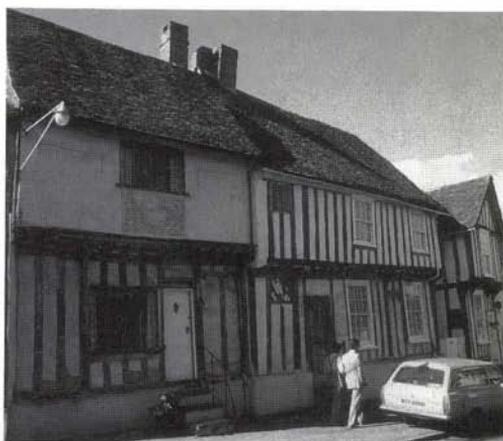


写真3 チャーチ・ストリート85～90番地

家が軒をつらねている（写真3）。左端八五番地の二階の壁に見られる化粧しつくい装飾模様は毛織物工業にかかわるものであるうか。軒先の草花や窓辺のカーテンに、古い家の中で現代も営まれている人々の生活の息吹きを感じることができる。

スワン・ホテルにとってかえしてウォーター・ストリートを右折すると、レイディ・ストリートの角にもとの羊毛取引所（写真4）がある。この建物は一五世紀にアウワ・



写真4 旧羊毛取引所

レイディズ・ギルドのギルド・ホールとして建てられ、一七世紀に羊毛取引所となり、一九六五年以降スワン・ホテルの一部となった。レイディ・ストリートの名は一五世紀のギルドに由来するのかもしれない。トマス・スプリングはこの通りのギルド・ホール近くに住んでいたといわれるが、その所在は確認されていない。

ウォーター・ストリートにもどると右に旧修道院の立派な建物があるが、修復の足場が組んであるので残念だが写



写真5 ドゥヴィア・ハウス

真は割愛して通り過ぎよう。右に杉綾模様の壁が印象的なドゥヴィア・ハウス(写真5)がある。一九二〇年代に解体・再建されたという。ドアの上に星と豚のシンボル・マークがあるはずだが、写真では識別しにくい。領主ドゥヴィア家のマナー・ハウスは教会の北にあったらしいが今はない。貴族の邸宅としてはさほど大きくはないこの家は何に使われていたのだろうか。

ドゥヴィア・ハウスの筋向いに白壁の三軒が長屋ふうにつながっている。左から五五〇五七番地である(写真6)。他のハーフ・ティンバー造りとちがって二階が一階よりせ



写真6 ウォーター・ストリート55~57番地

り出していないのは、一階の壁を道の側に移して家を広げたためであるという。かつてこの家にだれが住んでいたかはわからないが、一五八〇年にロジャー・ラッグルなる織元がこの通りに住んでいたことは確かだ。彼は遺言によつて裏庭と水路のある染色場を遺したという。津和野の町にみられるような水路がかつてはここを流れて通りの名となり、大青を使って青い織物を染めていた織元ラッグルが、この家で忙しく立ち働いていたのではないかという想



写真7 旧グラマー・スクール

像がふくらんでくる。あるいはまた、水路で考えられるのは、織りあがった布を水につけて木槌でたく縮絨しゆくじゆうという仕上げ工程も、このあたりでおこなわれていたのではなからうか。

ウォーター・ストリートからバーン・ストリートへと左にまがると右手に見えるのは、もとのグラマー・スクール（写真7）である。おそらく一六世紀初頭に建てられた民家が一七世紀以降グラマー・スクールとなり、画家コンスタブルや農学者アーサー・ヤングがここで学んだという。ふたたびウォーター・ストリートにとってかえすとその



写真8 織布工の小屋

角に織布工の小屋、左から二三〜二六番地（写真8）である。二四番地の説明板によると、一三四〇年ころフランドルから移住してきた織布工の小屋で、もと五軒あったものを一九五六年に修復したという。もつともフランドルの職布工がラヴェナムに住んでいたという確証はない。ただし一五二二年にラヴェナムで調査された一六歳以上の男子一五七人中五六人、つまりほぼ三分の一が織物業に従事し、そのうち一五人が織布工であったことは事実である。

ウォーター・ストリートはまもなく畠に続いていて民家はなくなる。その手前のシリング・ストリートでは、一八世紀ジョージ王朝様式の玄関をもつアランドル・ハウスと、一五世紀にシリング家が住んでいたシリング・オウルド・グレンジを見た後スワン・ホテルにもどる。

ハイ・ストリートから市の広場へ

スワン・ホテル前のハイ・ストリートを北に進むと左手に一五世紀のものといわれる数軒の民家、六番地から二番地が並んでいる。そのうちの一軒、八番地(写真9)は通称「曲がった家」と呼ばれている。

ハイ・ストリートから右に折れてマーケット・レインという小道を行くと広場に出る。これが市の広場 (market place) である。一二九〇年、ラヴェナムの領主にたいして、聖霊降臨節の一週間、大市 (fair) を開く特許状が与えられた。いわば遠隔地市場圏の中心地である。くだつて一五二七年、毎週火曜日に開く週市が認可された。局地的市場圏である。立ち並ぶ屋台のあいだを縫って、人と物がゆきかった当時のにぎわいが想像もできないほどひっそりとした広場の中央に、一本のマーケット・クロス(写



写真9 ハイ・ストリート6～9番地

真10)が立っている。

一五〇〇年に書かれた富裕な織元ウィリアム・ジャコブの遺言によって、彼がケンブリッジの市の広場にあるものを手本にして、自分の費用でここにマーケット・クロスを建てるように指示したことがわかっている。柱は後代のものであるが、段のある台座は建築当時のままだに残されているという。

広場に面してその南に建っている大きい建物は、もとこ

ルプス・クリステイ・ギルドのギルド・ホールであったもの（写真11）。一五二四年の課税簿によると、当時のラヴェナムには四つのギルドがあった。先に見たレイディ・ストリートにあったアウア・レイディズ・ギルドとこの広場のギルドのほかに、ハイ・ストリートにあったセント・ピーターズ・ギルドとブレンティス・ストリートにあったホウリ・トリニティ・ギルドであるが、あとの二つは一九世紀末に取り壊されて今はない。この広場に残されたギルド・ホールはナショナル・トラストによって保存され維持されている。

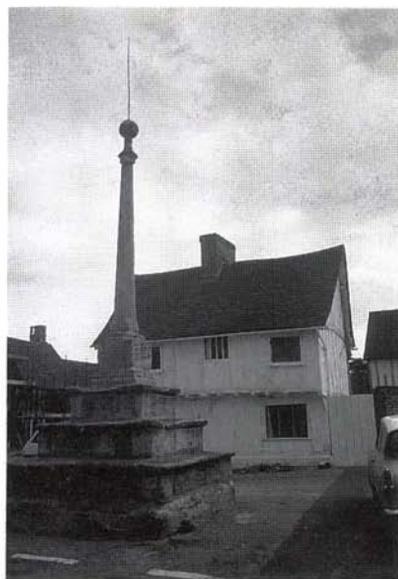


写真10 マーケット・クロス

市の広場から北に抜けるブレンティス・ストリートにはいると左側の二四番地（写真12）は、一五世紀の羊毛商人の家で、二つの切妻壁を支える腕木は一七世紀のものであるという。ナショナル・トラストのパンフレットはこの家をヒッチコック家のものと説明している。たしかにブレンティス・ストリートに住む羊毛商人トマス・ヒッチコックの名が一八四四年の記録にみえるが、一五世紀にまでそれがさかのぼるものかどうかは確認できない。



写真11 ギルド・ホール

九月下旬の夕方ともなるとイギリスでの風は冷たい。市の広場に面してプレntenティス・ストリートの左角にあるエンジェル・ホテルと右側にあるリトル・ホールが、いずれも一六世紀の織元たちの遺言によれば、彼らの持ち家であつたり住居であつた可能性は高い。けれどもスワン・ホテルへの帰りを急いだわたしにとってこのことはいわば後知恵であつて、ていねいに見ていないし、そのためか、写真が残っていないのは残念である。



写真12 羊毛商人の家

スワン・ホテルで一夜をすごした翌朝、ギルド・ホールの開館一〇時半を待つあいだに、ハイ・ストリートで昨日見残した六一〜六三番地(写真13)の前に立った。ペヴスナーはこれを「最良の建物」と評しているが、さながら絶妙の芸術作品の趣きがあつて、この写真はわたしがイギリスで撮った写真の中で最も好きなものの一枚である。



写真13 ハイ・ストリート61〜63番地

ギルド・ホールの入館料四〇ペンス、パンフレットの三〇ペンスはナショナル・トラストによって建物の維持費にあてられる。館内では「ラヴェナムと毛織物業」と題するパネル展示があつて、諸工程とその歴史を写真によって説明してくれるが、広幅織の手織り織機があつたものの、諸工程にかかわる道具の実物はあまり見られなかつた。

ギルド・ホールを出て広場に立ち、回想のラヴェナムを立ち去る前に、後知恵をもう一つ紹介しておこう。

広場は市場であると同時に祭り広場でもあり、罪人をさらし者にするお仕置きのある場でもある。しかし広場はまた権力にたいして民衆が集まる抵抗の場でもあつた。シェイクスピアの戯曲『ヘンリ八世』第一幕第二場、王と王妃キャサリン、枢機卿ウルジー、ノーファク公らとのやりとりの中で、財産の六分の一を徴収しようとする課税に反対して、織物職人が暴動をおこしているという話が出てくる。その発火点となつたのがまさにここラヴェナムの市の広場であつた。一五二五年五月四日、武器をもつた一六九人がこの広場に集まり、翌五日には五〇〇人をこえるまでにふくれあがつた群集が、二度にわたつて徴税官を追い払い、サドベリに陣を移したときには一〇〇〇人となり、夜

には周辺の農村をふくめて群集は四〇〇〇人をかぞえたという。ラヴェナムの市の広場は、五月末にはふたたび静けさをとりもどしたが、これは、小さな町の民衆がついには政府の企図を挫折させるにいたつた稀有の出来事であつた。

〔付記〕ラヴェナムの略図はダイモンドとベタートンの後掲書一一四ページの地図をもとにして筆者が作成したものである。筆者は一九七九年以降この地を再訪していないので、その後の変化は示されていない。最近のラヴェナムの略図は、インターネットの <http://www.lavenham.co.uk/info/map/> によって知ることができ、その地図にスワン・ホテルは示されていない。なお、史実の記述については煩を避けるためページ数を示さなかつたが、次の文献を参照した。

- Dymond, D., *A Walk Around Lavenham*, Suffolk Preservation Society, 5th ed., Lavenham, 1985.
- Dymond, D & Betterton, A., *Lavenham 700 Years of Textile Making*, The Boydell Press, Woodbridge, 1982.
- Gardiner, R., *The Guildhall Lavenham Suffolk*, The National Trust, 1975.
- McClenaghan, B., *The Springs of Lavenham*, Ipswich, 1924.
- Pevsner, N., revised by Radcliffe, E., *The Buildings of England, Suffolk*, 1974.

Woods, Jr., R. L., *Individuals in the Rioting Crowd: A New Approach, Journal of Interdisciplinary History*, XIV:1, 1983.

松村幸一「サファク州臨時税課税簿（一五二四―二五年）の分析（中）」、『大阪経大論集』第五〇巻第一号、一九九九年。

右のうち *A Walk Around Lanham* は大阪経済大学・中川操教授のご提供により、建物の確認に役立たせていただいた。記して謝意を表したい。

（まつむら こういち・大阪経済大学経済学部教授）